# 23 飛騨匠神社

ひだたくみじんじゃ

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 飛騨護國神社：高山市堀端町 90 |

現在の建物は高山建築組合により、新社殿として昭和 36 年に新築されている。当初は飛騨国分寺境内に歴代工匠諸霊を併せて祭祀と供養がなされていて、この堂宇（どうう）を「木鶴堂（もっかくどう）」と呼び「木鶴大明神」を祀っていた。

木鶴大明神は国分寺の「大明神縁起」によると平安時代に飛騨市河合町天生（かわいあもう）から出て京に行き、さらに中国の唐へ渡って活躍した飛騨匠の「韓志和（からのしわ）」だという。しかし大工仲間があがめる「木鶴神」は、鎌倉時代に郡上市長滝寺の大講堂建立という大工事をなした藤原宗安（ふじわらのむねやす）をもって飛騨匠の祖としている。そして自分たちを藤原宗安の末裔だと信奉している。

明治１２年、城山公園三ノ丸に中教院（現在の飛騨護国神社）が創立されると、神霊は木鶴神像を残して国分寺より分離して中教院に遷され、明治 15 年、飛騨匠神社として高山中教院の皇大神宮内に祀られた。明治 17 年 1 月 2 日、匠神社例祭として定着（神道事務分局日誌）し、大工組合・木匠講などによって祭祀が行なわれるようになった。

明治２０年、久邇宮朝彦親王殿下より「木匠祖神（たくみのおやがみ）」の御神号を賜り、木匠祖神（猪名部眞根大人（いなべのまねのうし））を主神とし、相殿に飛騨工匠歴代の神璽と手置帆負神（たおきほをひのかみ）・彦狭知神（ひこさしりのかみ）２柱の神を祀る。

昭和 36 年の新社殿は、昭和 55 年、護国神社の社務所と遺品館建築のため、南側に移されて現在に至る。

匠神社　全景

匠神社　石碑

匠神社　正面

匠神社　軒裏

匠神社　高欄

匠神社　彫刻

# 24 千鳥格子御堂

ちどりごうしおどう

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 高山市荘川町六厩（くるまーと六厩内） |

金鉱が発見されて賑わいを見せていた六厩（むまや）で、慶長元和（1596 ～ 1624）の頃、この地の了宗寺の建立を終えた名工の棟梁が、その余材で旧軽岡峠の辻に「地蔵堂」を造った。御堂の扉として考えられたのが、謎に包まれた千鳥格子の秘法だった。この格子戸は檜の角棒を互い違いに組んでいるが、どこでどのように組み合わせたものか、外見では全くわからない立派な細工で、千鳥格子と呼ばれてきた。地蔵堂は昭和 34 年の新軽岡峠開削（しんかるおかとうげかいさく）、平成 4 年の軽岡バイパスの開通に伴い、旧軽岡峠の辻から新軽岡峠口を経て現在地へ移されている。移築時には復元された千鳥格子の扉もできている。昭和 46 年に高山市の文化財に指定された。

当初の千鳥格子は、長い年月の風雪に耐え、切り取られたり、秘法を知りたい人々の手ですり減っているが、無残になりながらも伝えられてきた秘法の造形に、往時の名工の密かな誇りが込められているかのようで美しい。その秘法扉をつけた地蔵堂は、新しい鞘殿の中に安置されている。

高山の名工岡田甚兵衛（おかだじんべい）は軽岡峠まで出向き、その組み方を解き明かそうと調べたが、外見からは全く解らない。やむなく扉の片隅を少し壊し、その秘法を盗んだという。その謎は噛み合わせ部分の切り込みの深さにあった。秘法を会得した甚兵衛は、早速高山で千鳥格子を使った御堂を建てたという。それが、高山市内東部を流れる江名子川に架かる助六橋の近くにある現存の稲荷堂（川上別邸）である。

千鳥格子御堂外観
（夏）

千鳥格子御堂外観
（冬）

外の格子から見た御堂

千鳥格子の扉（復元）

千鳥格子

龍の彫刻

# 25 高山陣屋

たかやまじんや

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 高山市八軒町 1 丁目 5 |

昭和 4 年に国の史跡に指定された。建物周辺の所有者は岐阜県、陣屋前広場は高山市。史跡範囲は 11,219.05㎡。現在遺構は「御門」天保 3 年（1832）、「門番所」天保 3 年（1832）、「御役所」文化 13 年（1816）、「御蔵」慶長年間（1596 ～ 1615）、「御勝手土蔵」天保 11 年（1840）、「書物蔵」天保 12 年（1841）、「その他・供待所、腰掛、中門」

元禄 5 年（1692）徳川幕府は金森頼旨（かなもりよしとき）を出羽国上ノ山に転封し、飛騨一円を幕府直轄領とした。それ以来、明治維新に至るまでの 177 年に、25 代の代官・郡代が江戸から派遣され、領地の行政・財政・警察などの政務を行なった。この「御役所」を「高山陣屋」と称している。陣屋設置以来、享保 10 年（1725）、文化 13 年（1816）と数度にわたって改築がなされ、幸いにも火災を受けなかった。明治になると、主要建物はそのまま地方官庁として使用され、昭和 4 年には国の史跡に指定された。昭和 44 年 12 月、ここにあった飛騨県事務所が移転し、復元修理と復旧事業が行なわれ、江戸時代の高山陣屋の姿がほぼ甦っている。

内部は、玄関の間が文化 13 年改築のままで残り、10 万石格を示す 2 間半の大床や、大名も使用をはばかった青海波模様が目を引く。御蔵は高山城三ノ丸に米蔵として建てられていたが、元禄 8 年現在地に移築された。軸部は慶長年間（1596 ～ 1615）のもので、良質のヒノキが使われ、仕上げも蛤刃手斧であり、年代、規模共に全国有数の穀物土蔵である。壁面の傾斜（四方転び）や通風の隙間など、飛騨匠の手法が見られる。

高山陣屋（国指定史跡）

青海波の文が施される玄関の間

廊下

下台所

御蔵

御蔵　くれぶき（長くれ）

# 26 春の高山祭　山王祭

はるのたかやままつり　さんのうまつり

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 高山市城山、日枝神社氏子区域 |

日枝神社（高山市城山）を中心に祭礼が毎年４月14、15日に執行される。

春と秋の高山祭は、今から約400年前に始まった。江戸時代初めの飛騨国主「金森氏」は、城下町高山を整備する際、城の守護神として日吉（ひえい）神社（現在の日枝神社）を設け、氏子の区域は商人町の南側としている。また、城下町の北方には産土神（うぶすながみ）として八幡宮を設け、商人町の北側区域を氏子とした。以来商人町の祭礼として発達し、日枝神社は春祭り、八幡宮は秋祭りの祭礼として、現在も厳かに続いている。

高山祭の屋台は、祭礼を盛り上げる「出しもの」として、今から300年ぐらい前から曳かれるようになった。江戸時代の「組」という単位の区域で屋台が作られ、各組が美しさを競い合い、絢爛（けんらん）豪華な屋台が作られるようになった。

神様が氏子の家々をまわる「御巡幸（ごじゅんこう）」、豪華な「屋台」の曳（ひ）きそろえ、多くの人に感動を与える。

奈良・平安時代に、秀れた木工技術を持っていた飛騨の匠は、都の宮殿などを作りに出向いたが、その技術は屋台の建造技術にも生かされ、絢爛豪華な屋台を作りあげた。屋台には、谷口与鹿（よろく）を始めとする飛騨の匠の技巧を凝らした木彫彫刻がある。どれも目を見張る作品ばかりで、鳳凰や鯉、唐子など、今にも動き出しそうな躍動感ある彫りがみられる。

また、春祭りには、能を外題（げだい）とした三つの「カラクリ」が奉納される。カラクリ人形の後方で綱方（つなかた）が数10本の糸を操り、樋（とい）の先の人形を動かしてゆくカラクリの妙（みょう）を見ることができる。屋台は春祭りが12基、秋祭りが11基あり、国の重要有形民俗文化財に指定されている。

屋台　琴高台（きんこうたい）

からくり奉納　三番叟（ざんばそう）

からくり奉納　石橋台（しゃっきょうたい）

麒麟台（きりんたい）　唐子群遊彫刻

恵比須台（えびすたい）　子連れ龍

夜祭りの様子

# 27 秋の高山祭　八幡祭

あきのたかやままつり　はちまんまつり

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 高山市桜町、桜山八幡宮氏子区域 |

桜山八幡宮（高山市桜町）を中心に祭礼が毎年 10 月 9、10 日に執行される。

「八幡祭」はおよそ 400 年前から始まった。江戸時代、例祭には金森国主より奉行（ぶぎょう）正副 2 名が特派され、奉行祭の祭式は、飛騨が幕府の直轄となってからも続けられている。

一番古い古文書は、享保 3 年（1718）に高山陣屋の地役人上村木曽右衛門が書いた「高山八幡祭礼行列書」を、天明 6 年（1786）に写した柚原三省（ゆきはらさんせい）の日記である。御榊・山車・神楽のほか屋台 4 台、笠鉾 2 台等々、御輿を別にして 48 番の出しものが行列を飾り、総勢数百人におよぶ大行列であったという。

「四元略筆記（飛騨遺乗合符 第 9 巻）」では、正徳六年、祭の行列が御坊坂（別院と真蓮寺の間の坂）を上り、馬場町へと進み城坂を下って中橋を渡り、御役所（おやくしょ）（高山陣屋）前に至り、ここで代官にお目にかけ氏子区域へ帰ったとある。

祭を統率する最高指揮官は「年行司」で、その年の祭事一切を司る最高の権限を持っている。廻番で役が回る。春祭りは「宮本」が最高指揮官である。

秋祭りの特色は、絢爛豪華な屋台である。高山祭の屋台はおよそ 300 年前にでき、神輿の行列に参加するようになった。屋台は 11 台が現存する。各組の屋台は競って他の屋台と構造装飾が異なるように工夫して造り上げている。どの部分を見ても、決して同じものがない。しかも屋台の持つ型をはみ出さず、曳そろえられて全体的に美しいという配慮があって特筆すべきものといえよう。布袋台のからくり奉納は桜山八幡宮の境内で行なわれ、糸が無いのに唐子が綾を渡ってゆくという精巧無比のからくりに観客は驚嘆する。

屋台曳き揃え

金鳳台（きんぽうたい）

仙人台（せんにんたい）

神馬台（じんまたい）　大般若面の刺繍

鳳凰台（ほうおうたい）　谷越獅子の彫刻

宵祭の様子

# 28 飛騨春慶塗

ひだしゅんけいぬり

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 高山市内 |

慶長年間（1596 ～ 1614）高山城下で、神社仏閣の造営工事に携わっていた大工棟梁、高橋喜左衛門が仕事中に、たまたま打ち割った材の批目の美しさに心を打たれ、その板を使って風雅な盆を作り、金森可重（ありしげ）の子重近（しげちか）（金森宗和（そうわ））に献上した。重近はその木目に感動し、御用塗師の成田三右衛門に木目の美しさを生かして漆を塗るよう命じた。三右衛門は素地を生かした透漆（すきうるし）で、その盆を塗り上げた。

成田三右衛門義賢（晴正）は京都で塗師をしていたが、お抱え塗師として飛騨に入国して春慶塗を考案し、その子成田三右衛門正利（三休）もお抱え塗師となり春慶塗の改良に貢献した。飛騨が幕領になっても飛騨春慶塗は地場産業として存続する。

飛騨春慶塗という独特の漆器が生まれ育ったのは、飛騨が良材の産地であった背景と、伝統的に自然の樹木の美しさを知りつくし、木の魅力を引き出す木地師の優れた技があったからである。

春慶漆は、原料漆に透明度の高い日本産の漆を使い、精製するときに荏油などを混合することで光沢と透明度をより一層良くする。この透明度の高い透漆が下地の表情を美しく魅せ、時を経るごとにその彩りを変化させながら、透明度をさらに増していく。木地は板物と、轆轤（ろくろ）による挽物（ひきもの）に分けられるが、飛騨春慶塗は板物の加工技術に特徴が見られ、「角物」と「曲物」がある。木肌の美しさを醸しだす木地師と、木肌の美しさを引き出す塗師の二者一体の共同芸術で成り立っている。

木地制作の様子

木地制作の様子（曲物）

カンバ刺し

塗師の作業場

塗りの様子

完成品

# 29 一位一刀彫

いちいいっとうぼり

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 高山市内 |

木の細工に匠の技を極めたのは江戸在住の平田亮朝である。亮朝は文化６年（1809）に高山で生まれ、若くして江戸の根付彫刻の大家といわれた山口友親（寛政 13 年江戸生まれ、３代続いた）の門に入り、江戸で根付彫刻の大家として大成した。浅草橋付近に住み、江戸で有名な日本橋通塩町の小間物問屋「日野屋」の大事なお抱え根付彫師として活躍。しかし、38 歳と若くしてその生涯を終えている。亮朝が江戸にいたとき、高山から江黒亮春（すけはる）、中村亮芳（すけよし）、松田亮長（すけなが）が弟子入りし、共に高山に帰って身を立てた。特に亮長は若い頃より彫物にすぐれ、写実的な小動物の彫刻を最も得意とした。材料も檜（ひのき）、なつめ、梅、竹などを使っていたが、のち一位材を用いて簡潔な彫痕を残す一刀彫の様式を完成させた。

旅好きであった亮長は、生涯全国各地を巡って見聞を深めて自己研鑽に努め、１年の半分を高山で過ごすことは希であったという。旅先は絵日記等によって知ることができ、各地の名勝地を遊歴し、彫工の名家を訪ね、古寺社の彫刻を研究するなどして心技を磨いた。

旅の途中で奈良人形を見て、その着色が非常に濃く、刀痕を塗り込めてしまい、技術の良し悪しがわからないので、自ら意匠を練って刀法を考え、彩色を施さずに飛騨の名木一位の天然の美しさを生かした簡潔な彫痕を残す一刀彫の様式を考案したとされている。

亮長の作品には写実的なものと、今日の一刀彫に見られる極限まで簡略化され、面で構成された、単純ではあるが、良くその物の特徴をつかんだ作品の２系統がある。亮長は明治４年（1871）３月 14 日、下向町の自宅において 72 年の生涯を閉じた。

一刀彫の材料（イチイ）

作業場

作業の様子

一刀彫の過程（木取）

一刀彫の過程

一刀彫の過程

# 30 高山市三町伝統的建造物群保存地区

たかやましさんまちでんとうてきけんぞうぶつぐんほぞんちく

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 高山市上一之町、上二之町、上三之町、片原町、神明町４丁目の各一部 |

昭和 54、平成 9 年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。地区の面積は約 4.4ha で、南北通りは約 420m、東西の幅は約 150m。伝統的な建造物が 172 棟あり、秋葉様社が 2 棟ある。恵比須台組町並保存会、上三之町（かみさんのまち）町並保存会、上二之町町並保存会、片原町町並保存会の 4 保存会により町並み保存がなされている。

天正 14 年（1586）、飛騨国主となった金森氏により商業経済を重視した城下町として形成された高山は、城を取り囲んで高台を武家屋敷、一段低い所を町人の町とした。この町人町の一部が現在の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）である。また、東西南北の 4 街道は城下町の中へ引き込まれ、高山は近世以来飛騨における政治、経済の中心地となった。昭和 30 年代後半、観光地化に伴ない町が汚くなりつつあった際、子どもたちが宮川に鯉を放流する活動をした。これを契機に町並み保存、町の美化を進める市民運動へと発展し、昭和 41 年には「上三之町町並保存会」が結成された。

道路に面した部屋を「ミセ（店）」と呼ぶ。建物の間口は 3 ～ 4 間と狭く。奥に深い。中に入って見上げてみると吹き抜けの天井は今にも通ずる空間を利用した建築手法である。息苦しい感じがせず、自然光のよさ、光の帯が差し込む様はすばらしいものがある。

高山の町家は、前側の屋根の軒桁の高さは 4.5m 少しと大変低い。屋根は道路の水路まで飛び出て、屋根から落ちた雨水がちょうど水路に落ちるように工夫がされている。

敷地奥の土蔵は防火の役割を果たしていて、連続する土蔵の列は延焼をくい止める防火帯として大きな効果をあげてきた。現在、この土蔵を大事にしている。

ベニガラ格子のある家

町家

高山市政記念館（旧高山町役場）

町家

町家

造り酒屋の杉玉

# 31 高山市下二之町・大新町伝統的建造物群保存地区

たかやまししもにのまち・おおじんまちでんとうてきけんぞうぶつぐんほぞんちく

| | |
|---|---|
| 時　代 | 江戸時代 |
| 場　所 | 高山市下一之町、下二之町、下三之町、八幡町、大新町１丁目、大新町２丁目、大新町３丁目、大新町４丁目の各一部 |

平成 16 年 7 月 6 日、約 6.6ha が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。南北通りは約 780m、東西幅は約 180m。鳩峯車組町並保存会、神馬台組町並保存会、船鉾台組町並保存会、豊明台組町並保存会、浦島台組町並保存会、大新町 1 丁目 3 班町並保存会、越中街道町並保存会の 7 保存会により町並み保存がなされている。伝統的建造物は 200 棟、その他の工作物 12 件、環境物件が 8 件ある。

旧高山城下町では、安川通りの南側が日枝神社、北側が桜山八幡宮の氏子区域とされ、前者を上町（かみちょう）、後者を下町（しもちょう）と呼んだ。本伝建地区は下町（しもちょう）のうち、特に越中街道と呼称された高山から富山に通ずる街道沿いに建てられた建造物群である。江戸時代後半から民家が密集するようになったが、特に大新町には職人や半農半商的な職能の者が多く、上町（かみちょう）の商家とは異なった歴史と性格を持っている。

下二之町には、かつて商人町であったにぎわいが今も残り、高山市民はここへ用事に来る。時計店、表具師、菓子屋、餅屋、クリーニング屋、農機具屋、文房具店、家具店、郵便局、料理屋、喫茶店など市民向けの店が多い。

餅屋では、正月のお鏡モチ、笹ダンゴ、オケソクを扱い、交通混雑時もアクセスしやすいこの町は、今日も馴染みの客が訪れている。

町並みの色は、ベンガラとススを 3 対 1 で混ぜ合わせ、格子や外観柱などに塗り、荏（え）の油で止めている。年月を経てあずき色になり、独特の町並みの色をかもしだす。

町家と看板

町家

町家

町家

金森左京屋敷跡

日下部民藝館